

「九州大谷真宗保育研究会」設立記念シンポジウム(第6回真宗シンポジウム)報告

去る2011年12月23日(祝)に、「九州大谷真宗保育研究会」設立記念のシンポジウム(第6回真宗シンポジウム)が行われました。このシンポジウムは「九州大谷真宗保育研究会」の立ち上げを内外に表明し、地域の幼稚園や保育所の皆さんと共にこれからの「真宗保育」を考える端緒となる機会として開かれたものです。

当日は、近隣はもとより、九州各地から、さらには遠くは東北からもご参加いただきました。幼稚園・保育所関係の方、寺院関係の皆様、九州大谷短大を卒業した卒業生、在學生、さらには高校生の参加もあり、総勢250名の参加を頂くことができ、成功裏に終えることができました。

今後、このシンポジウムを契機に、「真宗保育」についての研究の歩みがスタートします。研究の発展のため、これからも関係の皆様のご協力をお願いしたいと存じます。



以下、シンポジウムに参加した学生の感想レポートを掲載いたします。

休日でも自由参加だったにも関わらず、約4割の学生が参加しました。

「保育者のタマゴ」である在學生にとっては、シンポジウムで語られた内容は難しいものだったかもしれませんが、参加した学生一人一人が、これからの保育を担う者としての目標を持ったり、自分の経験を重ねながら理解したり、自らを問い直したり、新しい学びに出会って感銘を受ける姿などがありました。

学生たちの率直な言葉から、当日の雰囲気を感じていただければ幸いです。

■真鍋恵里(幼児教育コース1年生／福島高校卒)

シンポジウムで話を聞いて、真宗保育のことを知ることができた。「どんな人間もそのまま、すでに救われている」という言葉が印象に残った。

このようなシンポジウムに参加できる機会はあまりないので貴重な経験だった。先生方のそれぞれの考え方や思いを聞くことができ良かった。真宗保育というものは「これが正しい」「これが正解」という答えはないように思った。

実践発表で言われていたことだが、働いていると子ども主体の保育ではなく、いつの間にか保育

者主体の保育になっていることがあるという。季節の行事を追うことで精一杯になってしまい、クラス全体で保育を進めてしまい、子ども一人一人を見つめられていなかったそうだ。そんな時、真宗保育を通して、保育環境を整え、子どもたちと向き合う保育を取り組んでいこうになり、子どもに対し保育者の側から発することが多く、保育者が「受ける・受け取る」ことがとても少なかったことに気付かされたという話は印象深かった。

私も現場で働くようになったときに、つまづいてしまうことがあったら、今回のシンポジウムの話を出したいと思う。

■重松美咲（幼児教育コース 2年生／三井高校卒業）

自分の真宗保育についての学びや理解を深めたくて参加しました。

真宗保育シンポジウムを聞いて、今まで真宗保育がどのようにできていったのか、そしてどのように現在行われているのかと理解することができたように思います。いきなり「さあ、真宗保育を始めよう」といって簡単に始められるものではないし、環境(保育を行う場)を整えることだって一日でできるはずはなく、一日一日の地道な積み重ねによって徐々にできていったのだろうと思います。

「真宗保育とは、本当にこの保育でいいのだろうか」「本当にこの保育が真宗保育なのだろうか」と疑問に思っていたと、鴻ノ巣保育園の園長先生が話してくださいました。確かに、どの保育方法にも終わりはない。そこからまた様々な方向から保育を考えて行かなくてはならないと思っています。「こうするには何をどうしたらいいのだろうか」と子どもにとっての影響を考えながら取り組んでいくことは、難しく容易なことではないはずです。鴻ノ巣保育園が今まで取り組んできた保育の内容を様々な立場から丁寧に説明されており、より身近に感じながら、自分が真宗保育をする上で一つの道筋を見いだすことができたと思いました。

行事を行うにしても、一つ一つに行う意味があり、子ども達にこういうことを学んで欲しいという課題があるということ。これが正しくて、これが間違いとはハッキリ言うことはできないだろうけど、どの保育にも「子どもは幸せになる権利がある」ということを前提とした、学び続けていく姿勢は重要だと思います。子どもたちを表面的に見るのではなく、今、子どもに必要なことは何なのかということと考えつつ、受け止め、日々考え続けることが子どもや保護者にとっての幸せに少しでも近づくことになるのではないかと思います。

■平井貴雄(児童福祉・心理コース 1年生／祐誠高校卒)

私は、真宗シンポジウムに参加して、「真宗」とは何か、「真宗保育」とは何なのかということ深く考えました。

シンポジウムの始めは、大谷の三明先生で、「真宗とは」についての話でした。私は、仏教や宗

教については全くの無知なので、正直、三明先生の話はよく分かりませんでした。少し宗教や仏教に触れることができ良かったと思います。三明先生の講話の中に「最近の学生」という話がありました。遊びにしても、学びにしても指示待ちが多いと言われていました。友人関係が希薄だとも言われていました。その背景には携帯のメールやインターネットのチャットなどがあり、生の人間との関わりが少ないのが背景にあるとのことで、私は「確かにそうだ」と思いました。今の私にはどうすることもできないけれど、この現状をそのまま未来まで続けたくはないと思うので、できることを少しでもできればと思いました。

次は、大谷保育協会理事長の脇淵さんの「真宗保育」についての話でした。脇淵さんは話の始めに「仏教保育ではなく、真宗保育なんだ」と言われ、「真宗保育は宗祖親鸞聖人の生き方に学べ」とも言われ、私は750年前に亡くなられた親鸞聖人がとてつもなくすごい人なんだと思いました。今、現在の保育に親鸞聖人の生き方が反映されて保育をしている園があるのだと思うとすごいと思います。

次は、短大の山田先生の「保育心理と真宗保育」についての講話でした。山田先生は「保育者は子どもに導かれる」「保育者が困ったときは子どものSOS」と言われたとき、私は実習を思い出しました。基礎実習、実習演習の時、困った場面がたくさんありました。その時の私は、子どものSOSに気付くことができませんでした。ですが、シンポジウムに参加して、山田先生の講話を聞くことができ、今後の実習で子どものSOSに気がつけるようにしたいと思いました。

私はこのシンポジウムに参加して、真宗についても、真宗保育についても、未だによく分かっていませんが、ほんの少しだけでも真宗や真宗保育について近づけたように思えます。将来、保育士になったときに、「真宗保育」に携われたらいいなと思っています。



■ 式島史花(幼児教育コース1年生／大牟田高校卒業)

私は今回のシンポジウムで、特に後半の幼稚園、保育園で実際に行われたことの話が印象に残りました。

長崎の鴻ノ巣保育園では、個人をととても大切にしているなと思いました。ご飯を食べるときには3:1、トイレに行くときには2:1で行きます。待っていて、隣の人より早く行く場合には、一言声をかけます。それがいいなと思いました。一人一人を大切に育ててもらおう子どもたちは、自分の命を大切に育てる子どもに育つのではないかと感じました。

大谷幼稚園の話では、まずDVDを見ました。とても感動し、印象に残っています。今私たちは、

命に感謝したり、親に感謝したりする機会が減っています。それは、親が子に対することも同じであると思います。感謝することで子どもは「自分は大切にされている」と感じると思います。そのような環境で過ごす、自分も大切にでき、さらに友だちも大切にできるようになると思います。

真宗保育の真は「まこと」、宗は「むね」、これがなければ生きていけないこと、ものです。真宗保育で大切なことは「私はあなたをちゃんと見ているよ」ということだと思います。辛さが少しでも軽くなって欲しいと願いながら保育をします。しかしその子の辛さがゼロになることはありません。少しでもその子が「生きていていいんだ」「考えてくれる人がいるんだ」と思ってくれることが大切だと思います。

今回の話で、さらに真宗保育が知りたくなりました。

■児童福祉心理コース 2年生

私は心理を勉強してきたので、真宗保育とは、子どもと一対一で関わるものだと思います。子どもが安心して関われるように、鴻ノ巣保育園のように少人数制にして保育をすることは、今とても大切なことだと思います。

同じ人から食べさせてもらう、同じ人から寝かせてもらうと言うことは、真宗保育の“共に生き共に育ち”を実践していることだと思います。

幼稚園、保育園によって真宗保育のやりかたは様々だと思うのですが、今日のシンポジウムを通して行事よりも大切なものがあるのではないかと感じました。もちろん、子ども達には伝わりやすいものだし、親鸞聖人について考える機会を与えることができるので行事があることは良いことだと思います。しかし、話を聞いていると真宗保育＝行事(報恩講など)という考え方があるように思えました。例え行事がなくても、日常で教えられることはたくさんあると思います。

子どもが“先生は私のことを考えてくれた”“友だちは私を待っていてくれた”と感じられる保育をするためには、まず私自身(保育者自身)が自分を大切にすることだと思います。

■藤木里美(幼児教育コース1年生/社会人入学)

真宗の教えと保育のつながりを今まで以上に理解でき、貴重なお話を拝聴させていただきました。一人一人のつながりが希薄と言われる昨今、「共に生き、共に育ちあう」ことがとても重要なことだと感じることができました。

三明先生のお話で「本願とは本当の願いを信じ、願われて生まれて、生きているということに気づく」とおっしゃっていました。名付けられたことは、名前に込められた願いがあり、誰もが願われて生を受け生きているということ、願われていると言うことに気づくと「ありがとう」という気持ちが生まれるということも深く感銘を受けました。

今の時代に必要なことが、真宗の信念であることも理解できました。保育の現場とは、家庭の代

わりとなる場なので、子どもが安心して過ごせる環境が必然であり、子どもと関わることで保育者が喜びを感じ、共に生き、活かされていることを感じるができる素敵な場だと感じます。保育者が子どもの気持ちを代弁でき、また、子ども自身も気持ちを言葉にできるような関わりができる保育者でありたい、子どもが私を必要としてくれる保育者になりたいと強く感じました。

自分の考えや気持ちを知らず知らずと押しつけることのないように一人一人の気持ちを考え、常に子どもの最善の利益を考えられるような保育者となれるように、日々の自分自身の生き方も、考え方も重要なことだと感じます。

私自身も生かされていることに感謝し、自分自身燃焼させながら、周りを明るく照らすことができ、他者と共に喜びを感じることができるような存在でありたいと願います。子どもの心を育てることが重要な保育者としての役割で、子ども自身の成長もあるでしょうが、関わることで、保育者となる私自身も心を育ててもらえることができるように感じました。

人は文字通り、互いに支え合って生きていけるので、子ども、大人、性別関係なくお互いの助けがあり生きているということを常に忘れず、一人一人を尊重し、感謝する気持ちを忘れずにいなければならないと感じました。今回のシンポジウムに参加し、様々な自分自身の考え、行動、言動について、保育者として、人としてどうあるべきかを深く考えさせられました。ありがとうございました。

■富松里美(児童福祉・心理コース2年生／社会人入学)

一番最後に言われた大谷保育協会副理事長の言葉が究極的な答えのように感じた。

「人は人にしか育てられない。では『では私は人であるか?』という問いから始まる」

この言葉には、まず保育者である大人が、自分の問いに気づき向き合うことから始まるとおっしゃっているのではないかと思う。

子どもに教えることや集団に合わせることにとらわれず、困難を抱えた子の気持ちに寄り添い、どうしたら生きやすくなるかをその子の目線に合わせて考えていくことは、なかなか難しい。それは、自分の価値観を横に置き、相手の目線に合わせてからであり、自ら歩み寄るからである。それは、生きる中で積み重ねた価値観を自ら変えることでもある。どんなことでも、自分を否定するのは難しい。しかし、変化することを恐れていたなら、子どもとは向き合えないように感じる。

子どもと向き合うことは、人と向き合うことであり、自分と向き合うことであるのではないか。脇淵先生がおっしゃっていた「保育スタイルは様々で、良かれと思ってやっている。これは『子どもを素直に育てたい』という一つの欲求である。欲求の奥に、私たちは自らの人生を喜びたいという思いがあるのではないか。ひょっとしたら、子どもを自分の思うとおりにしたかったのではないか、と自らに問う。保育者自身が自らを問うことから始まる」と言葉がとても印象的だった。

自分は保育者の前に、人間であり、どんな人間であることを知ることを行わなければ「共に生きる」ことはできないように思う。